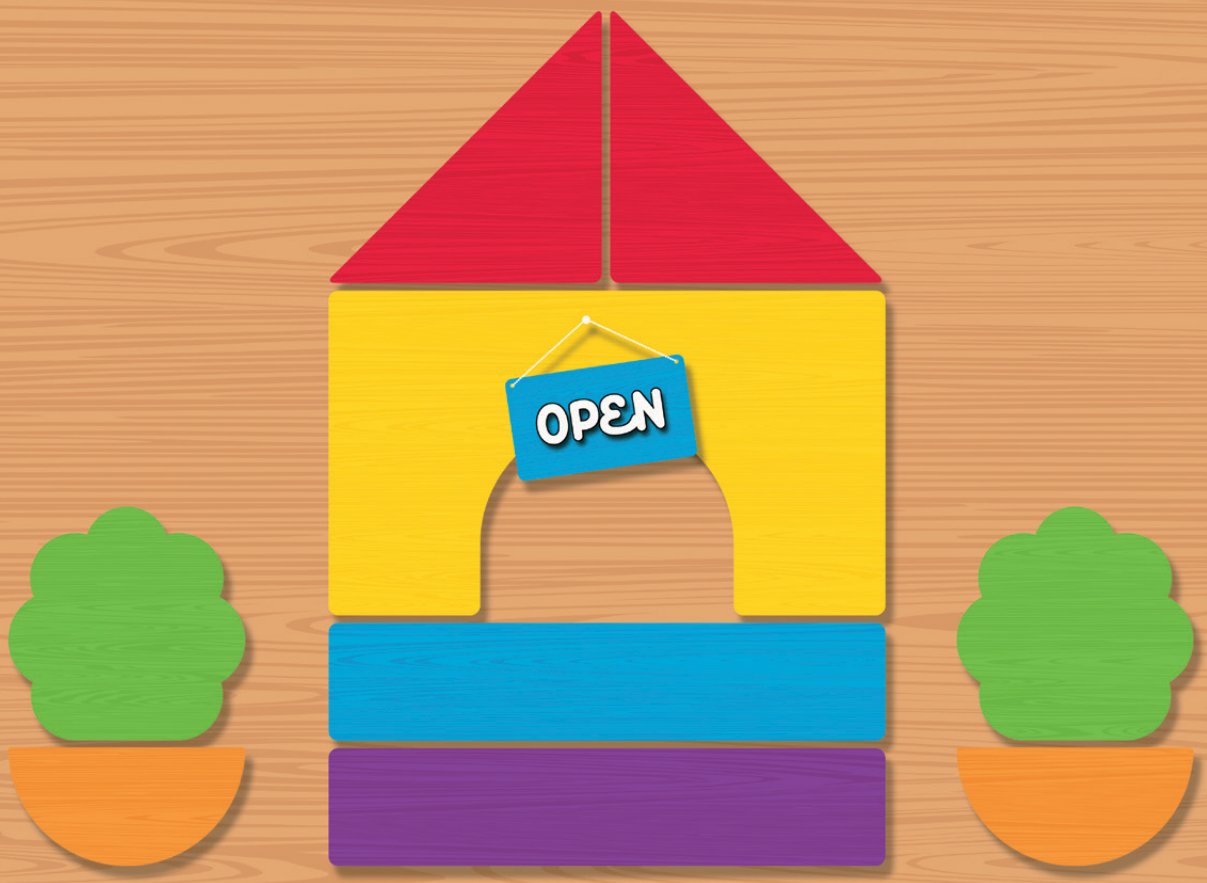
LGBT支援ハウス 2019年度 報告書



LGBTハウジングファーストを考える会・東京

ごあいさつ

「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」は2017年に設立し、さらにシェルターの運営開始から1年が経ちました。立ち上げ当初から、何人もの関係者のご支援を賜りました。さらにクラウドファンディングなどを通じて、たくさんの方からのご支援・ご寄付を賜りました、衷心より感謝申し上げます。また、生活協同組合パルシステム東京からの助成金によってこの事業報告書を作成することができました、深謝申し上げます。

この事業は、私もスタッフとして関わっている「カラフル＠はーと」が貧困×LGBTをテーマにしたシンポジウムを行ったことがきっかけです。「つくろい東京ファンド」の稲葉剛氏と私たちLGBT当事者の有志が出会い、LGBT向けの支援ハウスを作ろう、という掛け声からこの事業が始まりました。私たちは困窮したLGBT当事者に安心して住める場所を提供し、さらに生活を再建する手助けをしたいと活動しています。

私自身は学生時代にセクシュアルマイノリティだと自覚しました。同級生からのいじめに遭ったり、働きだしてからは、職場から排除されたり、人間不信で自己否定的になって引きこもった時期もありました。辛い時期を乗り越えることができたのは、LGBT当事者の仲間の支えと、理解ある支援者のおかげです。

現在、私は福祉の現場で働いています。LGBT当事者であるかどうかに関わらず、多くの困窮者・相談者は孤立しがちで、何らかのスティグマに苦しんでいるように思います。LGBT当事者であればなおさら、偏見の根深い社会の中で様々な生き難さがあります。LGBTの困窮者が公的機関につながったとき、周りの差別や無理解等に晒され、そこを自分の居場所にできない、そんな話をよく聞きます。実際に福祉の現場で差別や無理解な発言も時々耳にします。LGBTの困窮者の状況は、私にとっては他人事には思えませんでした。何か少しでも手助けになることがしたい、そんな想いで活動を続けています。

LGBTハウジングファーストを
考える会・東京
代表　松灘かずみ

LGBT ハウジングファースト を考える会・東京

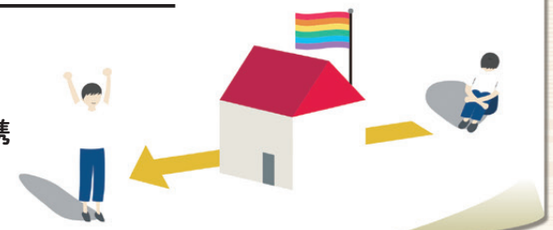
私たちは、貧困などによって住まいを失ったLGBT当事者が、社会復帰するために安心できる住まいとサポートを提供しています。生活困窮状態になったLGBT当事者が既存の福祉施設を利用する際、同性からの暴力を受けてきた人が同性の人と相部屋になったり、自分が希望する性別でのケアを受けられないなど、社会復帰に向けて支障となる場合があります。そのようなニーズを受け、LGBTや生活困窮者の相談に携わってきた支援者の有志が集まり、当団体を設立しました。クラウドファンディングでいただいた支援金をもとに、2018年12月、都内に支援ハウス（1室）を開設しました。複数の関連団体との連携のもと、これまでに4人の方が、自立生活に向けて支援ハウスを利用しています（2020年2月現在）。

プロジェクト概要

「LGBT支援ハウス（通称：虹色ハウス）」は生活困窮、DV（ドメスティック・バイオレンス）などによりサポートが必要なLGBT当事者のための支援ハウス（個室シェルター）です。次の3つのサポートを行います。

LGBT支援ハウスの「3つのサポート」

1. 安心できる住まいの提供
2. 医療・福祉サービスとの連携
3. 相談支援の提供



1. 安心できる住まいの提供

ゲイ・バイセクシュアル男性やトランスジェンダーの場合、同性から性暴力を受けた人が、さらに同じ性別の人と相部屋になったり、ご本人が望むのとは異なる性別での施設入所を余儀なくされることがあります。LGBT支援ハウスでは、ハウジングファーストの理念の下、ジェンダーやセクシュアリティに配慮した、安心できる住環境を個室で提供します。

2. 医療・福祉サービスとの連携

LGBT支援ハウスの利用が必要な方には、生活困窮、精神障害、HIV、依存症、暴力の被害など、複数の生活上の課題を抱えている場合が少なくありません。安心できる住環境へ避難した後、プライバシーに配慮した上で行政や地域の医療・福祉サービス団体と連携を図ります。生活保護の申請や病気の治療、就労支援など、利用者にとって必要なサポートを提供します。

3. 相談支援の提供

様々な悩みを抱え一時避難が必要な状況から、再び生活をやり直していくためには、自分自身の置かれている状況を整理し、これからどう生きていくかを落ち着いて考えていくことが必要です。また、利用可能な様々なサービスの情報を得ることも重要です。LGBT支援ハウスでは、相談援助の専門職が利用者の個別の悩みや課題へ相談支援を行い、新しい一歩をサポートします。

「ハウジングファースト」とは

ハウジングファーストとは、「住まいは基本的な人権である」という理念のもと、ホームレス状態にある生活困窮者に対して安定した住まいの提供を最優先にする支援アプローチのことです。

従来のホームレス支援では、「ホームレス状態にある人々、特に精神や知的の障害を持つ人が地域生活を送ることは難しく、居宅に住むための準備期間が必要である」という考え方のもと、一定期間、施設などでの集団生活を経たのちアパート入居をめざす、というステップアップ方式が採用されてきました。

1990年代にアメリカで始まったハウジングファースト型の支援では、利用者に無条件でアパートを提供し、精神科医、看護師、ソーシャルワーカー、ピアワーカーなど多職種からなるチームと地域が連携して、その人を支えていくという手法が採られています。ハウジングファースト型の支援は欧米のホームレス支援の現場では一般的になりつつあり、重度の精神障害を抱えるホームレスの方の支援でも有効であることが実証されています。

沿革

「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」のあゆみ

2017年	8月12日	第1回会議@ぷれいす東京（6名参加。これ以降会議を定期開催。福祉事務所のケースワーカー、保健師など関係者へのヒアリングをとおして情報収集とメンバー集めを行う）
2018年	3月21日	LGBT関係団体との意見交換会@スマイルなかの（26名参加）
	5月2日	LGBTハウジングファーストを考える会・東京 キックオフイベント「LGBT×貧困→ハウジングファースト」@なかのZERO（117名参加）
	7月13日	記者懇談会@新宿区大久保地域センター
		ボランティア説明会@コミュニティセンターakta
	7月15日	クラウドファンディング開始（～9月30日）
	9月30日	クラウドファンディング終了（支援総額1,562,000円）
	10月16日	相談支援機関との意見交換会@スマイルなかの（18名、9団体参加）
	12月17日	都内のアパート1室を支援ハウスとして契約
2019年	1月22日	LGBT支援ハウス稼働開始。最初の利用者の受け入れ開始
	5月1日	「LGBT×貧困→ハウジングファースト2019～虹色ハウスの実践報告～」シンポジウム@なかのZERO（70名参加）
	7月11日	中野区内の地域保健・福祉専門職との意見交換会
	10月10日	難民支援協会との意見交換

キックオフイベント

シンポジウム

クラウドファンディング

意見交換会

LGBT関係・社会福祉団体

日時：2018年3月21日
場所：スマイルなかの
参加者：LGBT当事者向け活動及び社会福祉関係等の事業従事者

［主な意見］
●利用対象を絞る必要がある。
●シェルターは緊急避難的なもの。通常の施設での配慮を求めることも大切。
●地域の理解が広がるようにする。
●シェルターの実現はもとより、そこからどんなニーズがあるのか、既存の支援をどう活かせるか考える必要がある。
●運営資金をどう集めるかが重要。
●社会課題であることや支援実践者の声を可視化する。国会へのロビーが必要。

協働団体

日時：2018年10月16日
場所：スマイルなかの
参加者：協働団体の方

［主な内容］
●物件確保の進行状況や相談受付から入居までの流れを説明。
●利用受付の際に協働団体から提供が必要な利用者情報や実際に入居後に起こりうるリスクなどの検討を行った。
●この話し合いを受け、相談受付や入居上の注意事項の整理がされ事業開始の準備が進む。

地域保健・福祉関係専門職

日時：2019年7月11日
場所：スマイルなかの
参加者：中野区内の保健・福祉従事者及び専門職

［主な意見］
●支援を受けるのをためらう人もいる。友人などから連絡がくるケースがある。
●電話を持たない相談者との連絡手段をどうするか。SNSで対応する場合も。
●社会福祉関係団体にLGBT支援ハウスの情報を提供したり、関わる機会を作る。
●地域の人への開示は、セクシュアリティについてさえ難しいのに、HIVや精神疾患等も加わると、非常に難しくなる。

イベント

『シンポジウム「LGBT×貧困→ハウジングファースト」』

キックオフイベント

日時：2018年5月2日 19時～21時
場所：なかのZERO視聴覚ホール

東京レインボープライド2018のプライドウィーク期間中に、「LGBT×貧困→ハウジングファースト」と題したシンポジウムを開催。「相談事例の紹介、DV・虐待サバイバー支援の現場から見えてくること」というテーマで、ハウジングファーストの先駆けとして、都内で生活困窮者の住宅支援を行っている「一般社団法人つくろい東京ファンド」など関係機関の協力のもと、貧困などにより住まいを失ったLGBT当事者へのサポートについて考えた。普段、陽の当たりづらい問題にも関わらず、たくさんの方が関心を持ち、私たちの話を真剣に聞いてくださった。また、少なくない方々から貴重なフィードバックもいただいた。

「日本初！ 貧困・孤独・病気 負のスパイラルから抜け出すための『LGBT支援ハウス』をつくりたい！」

クラウドファンディング

期間：2018年7月13日～9月30日

2018年7月、初期資金調達のため、「GREEN FUNDING-SHARE YOUR HEART」の全面協力によりクラウドファンディングを開始した。アルファ・ロメオ（FCAジャパン株式会社）及び中村キース・ヘリング美術館に返礼品の提供などで協力をいただき、当初設定目標であった100万円を超え9月の終了時には、191人のご支援をいただき1,562,000円の資金を集めることができた。また、多くの反響を呼び、報道機関やSNS等で幅広く情報が拡散され、大勢の方にこの取り組みを知ってもらうこととなった。なお、寄せられた資金は、主に支援ハウス物件の確保のための初期費用（敷金・礼金）や家具什器、広報チラシや素材制作費に使用された。

「LGBT×貧困→ハウジングファースト2019～虹色ハウスの実践報告～」

シンポジウム

日時：2019年5月1日 14時～16時
場所：なかのZERO西館 学習室4

概要：［第1部］LGBT支援ハウスプロジェクト報告（生島嗣、いくの学園スタッフ）［第2部］シンポジウム「これらの活動をコミュニティでどう支えるのか？」（柳沢正和、松中権、稲葉剛、いくの学園スタッフ、石坂わたる）
1月末から入居を開始した「虹色ハウス」では、すでに3人のゲイの当事者に対し住まいを提供した。1カ月に1人ずつという利用のペースは、当初予想していたより早く、それだけニーズがあったということ。課題は、様々なケースに柔軟に対応していくこと。また、今後どのようにこのプロジェクトを継続させていくか。特に運営の費用について、どうやって持続的に確保していくのかを考えていく必要がある。

支援の実際

入居までの段階

入居にあたっては、まず、当会が連携している協働団体(※) などからの情報提供を受け、スタッフが、現時点での住まいの有無、セクシュアリティ、経済状況、周囲に相談できる人の有無などを確認します。その上で、ご本人と対面での面談を設定し、入居が決定したらサポートが始まります。

利用者は、住まい、収入、仕事など、ほとんどの生活の基盤を失っている場合が多いので、ご本人の状況と意向を確認しながら、必要に応じて生活保護の申請を検討することもあります。

情報提供	協働団体（NPOなど） 情報提供者
↓	
アセスメント	協働団体（NPOなど） 支援ハウス・スタッフ
↓	
申し込み	支援ハウス・窓口 メール・電話
↓	
入居決定	支援ハウス・担当 対面
↓	
入居、相談、支援	支援ハウス・担当 相談・連携機関など

協働団体

＊認定NPO法人ぷれいす東京　＊カラフル＠はーと　＊認定NPO法人グッド・エイジング・エールズ　＊クライシスサポートセンターnolb　＊認定NPO法人 SHIP　＊よりそいホットライン　セクシュアルマイノリティ専門ライン　＊一般社団法人つくろい東京ファンド　＊NPO法人共生社会をつくるセクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク

入居後の支援内容

支援ハウスの利用期間は、およそ3カ月以内を目途としていますが、入居者の健康状態などに応じて、柔軟に設定しています。その間、スタッフが面談を行ったり、日常生活に関する相談支援や、関係機関の紹介などを行い、自立生活に向けたサポートをします。とくに、精神障害やHIVなど他の課題がある場合、それぞれのニーズに応じた医療機関や就労支援団体等とも連携しながら、生活をサポートします。

これまでの入居利用や相談の実績

2019年1月から入居受け入れを開始してから、1年間で4名の方が利用されています。支援ハウスで生活の基盤を整えた後、それぞれが就職やアパートでの自立生活に移っています。現時点で、支援ハウスはアパート1室のみであるため、ほぼ満室状態が続いています。入居した方以外にも、16名の方から相談や利用に関する問い合わせが寄せられました（2020年1月時点）。

支援ハウスの利用例

短期間のシェルターとして利用し、就職につながったAさん

最初に入居したAさん（40代／ゲイ男性）は、工場などでの住み込みの派遣仕事を短い期間で転々としてきました。職場の上司を信頼しカミングアウトしていましたが、上司からセクシュアルハラスメントを受ける被害に遭い、改善策を申し入れるも会社からの適切な対応がなかったために寮から逃げ出し、同時に仕事も失うことになりました。

食費など、当面の日常生活に必要な最低限のお金は持っていたため生活保護は受給せず、1カ月ほど支援ハウスを利用しながら就職活動を行った結果、寮付きの職場が見つかり、転居されました。

生活保護の受給を経て、地域での自立生活に移行したBさん

次に入居したBさん（30代／ゲイ男性）は、パートナーからの暴力を受けて路上生活をしていました。公園で出会った人から住居付きの就職先を紹介されましたが、給与の大半を「家賃」として天引きされていたほか、ゲイであることを同僚に知られいじめが始まったため、寮を抜け出してしばらく友人宅に身を寄せていました。また、持病がありましたが、通院治療も中断していました。

友人からの連絡を受け、支援ハウスにつながった時点では所持金がほとんどなく、スタッフが福祉事務所へ同行して生活保護を受給することになりました。その後、支援ハウスの近くにアパートが見つかり、現在は一人暮らしをしています。

海外から帰国。生活保護の受給と医療機関につながったCさん

3人目の入居者となったCさん（40代／ゲイ男性）は、もともと海外で暮らしていましたが、仕事が立ち行かなくなったために生活困窮に陥りました。持病の通院治療も中断したため、見かねた現地の友人たちからの援助を受けて、なんとか日本に帰国することができました。ところが実家との関係が悪く、また、体調も悪く就労が困難なことから、支援ハウスを利用しながら、療養生活を送ることになりました。現在は、近くのアパートで一人暮らしに移っています。

利用者の声

支援ハウスを利用することができて

詳細を話すと長くなってしまうので、支援ハウスを利用させていただくこととなった要点と感想だけを書き留めます。

勤務先では、２カ月に一度の投薬治療や採血のための通院すら認められず、ましてHIVという、治療しないと亡くなってしまう病気であるという認識はあれど、治療の必要性や重要性すら認識していない会社であり、退職の日時すら話し合いにならない会社でした。

そのうえ、社宅という住まいはあてがわれてはおりましたが、職場から至近のため、体調不良であっても強制的に出社させられるという最悪な環境であり、病状は悪化していくばかりであり、悪循環となっていくばかりだったのです。

退職日が決まらず、また、HIV陽性が判明し、ゲイであることが親兄弟にわかってしまって以来、実家とも疎遠になり住宅確保のための保証人は頼めず、ましてやすぐに居住先を探すような時間も、金銭的なゆとりも、精神的にも無理な状況でした。

市役所にも相談したのですが、居住先の確保等の支援申請を行おうにも「まず、住み込みで働ける場所を探しましょう」と、かたくなに受け付けてもらえませんでした。

そこで、知人の紹介を受け、面談をしていただき、支援ハウスに一時入居をさせていただくことになったのです。

支援ハウスでは、一通りの生活に困らない設備があり、また、入居後も毎回面談時にフォローアップしていただけるので、本当に助かりました。

正直、このような支援がなければ、不仲な親元で、そして不仲な姉兄の訪問にストレスを溜めながら、もっと精神的にどうしようもなくなっていたでしょう。もしくは、いくあてもなく、路上で生活をすることになっていたやもしれません。

現在は障碍者枠での就職を目指し、まずは現在の体調を整え、転職に向け調整をしています。

本当に支援ハウスのおかけで助かりました。

カフカ（40代／ゲイ男性）

支援者の声

「周囲の人からの相談をきっかけに」

支援ハウスの利用に関する相談には、本人から連絡してくる場合もあるが、それ以外にも、友人や周囲の人たちから持ち込まれた事例がいくつかある。より困難な状況にいる人ほど、「助けて」と自分からSOSを出すのが難しい傾向があり、それを見かねた周囲の人たちからの相談が多くなると感じている。

「携帯電話がない場合には？」

相談を受けたタイミングで支援ハウスに空きがある場合、入居が可能となる。その際、ご本人が希望する場合には、生活保護等の福祉サービスを利用するなど、行政にアクセスすることもできる。しかし、私たちの想像が及ばない現実にも直面する場合がある。

例えば、住まいを失う中で、携帯電話などを使えなくなる人がいるのだ。支援ハウスで準備しているWi-Fiや、地域にある無料Wi-Fiを通して、メール等を使用することは可能だが、行政の生活保護担当者との間ではSNSを利用することができず、電話のみが連絡手段となる。そうなると、行政から本人に連絡をとる必要があるときにも電話が使えないため、当団体がその間に入り、ご本人とのやりとりを仲介するという場面があった。

決算報告

LGBTハウジングファーストを考える会・東京　2018年度決算報告

2018.10.1～2019.9.30

	金額（円）
経常収益	
受取寄附金	31,809
受取助成金	50,000
クラウドファンディング支援金	1,562,000
事業費収益（支援ハウス）	228,401
事業費収益（啓発）	38,000
受取利息	4
計	1,910,214
経常費用	
事業費	
業務委託費	169,558
印刷製本費	700
旅費交通費	1,140
通信運搬費	48,060
家具什器費	45,800
消耗品費	20,027
賃借料	929,640
会場費	3,300
手数料	187,698
雑費	21,092
小計	1,427,015

管理費	
業務委託費	173,888
通信運搬費	1,865
消耗品費	2,521
手数料	4,212
小計	182,486
計	1,609,501
当期経常増減額	300,713
前期繰越正味財産額	11,946
次期繰越正味財産額	312,659

今後の展望

2019年1月、皆さまの支援、寄付により、LGBT支援ハウス「虹色ハウス」が東京都中野区内にオープンしました。

1室の運用で、これまでに4人の利用者が入居しました。ほぼ空き期間はありませんでした。このほか、入居には至りませんでしたが、メールや支援ネットワークを通して寄せられた相談は多数あります。

私たちは、虹色ハウスを運用するという経験を通して、未解決のニーズを把握し、それを皆さまと共有することができると考えました。実際、この1年間に私たちは多くの声に接してきました。

その内容は私たちの想定を超えていました。1つ目は、地方都市に住む当事者からの悲痛な叫びでした。家族の中にも、地域の中にも、性的な少数者である自分が安心していられる場所がない。できたら、東京に移住したいが、経済的に難しい。支援ハウスに入居できないかという相談です。現在、家がある人たちは対象外だと考えているので、入居には至りませんでした。

2つ目は、外国籍の人たちからの相談です。海外から日本に来た。現在、難民申請中だけれども、居場所がない。住居支援が受けられず、公園で寝泊まりしているものでした。

3つ目は、セクシュアリティに加えて、何らかの依存、メンタル課題、パートナー間のDVなど、複数の課題が重複している相談です。

私たちは、今後も虹色ハウスという場の運営を通して、満たされていないニーズと向き合いつつ、地域の支援機関と連携しながら活動を続けていきます。地域の行政や支援機関との意見交換をすでに始めています。

虹色ハウスは、皆さまからのご支援がなくては、続けていくことはできません。

LGBTの生きづらさを可視化するための装置として、ぜひ、皆さまのお力添えをお願いします。

「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」理事
「認定NPO法人ぷれいす東京」代表

生島 嗣

応援メッセージ

もし、思いもかけず住む場所をなくし、頼る人もない状況になったら…。そんな時に、住む場所を提供してもらえたら、そこを陣地に再出発の試みに打って出られるかもしれない。想像力をちょっと膨らませると、そこはすぐに理解できます。だけど、その支援にLGBTという言葉が被さっていると、ハッと気づかされます。自分の性的指向や性自認が、その支援に頼ることを躊躇させることはないのか…と。いろんな支援のサービスが提供されるようになった今こそ、このような肌理の細かいサービスがあることが、自分も含めて性的マイノリティにどれだけの安心感を与えてくれるかと感謝の気持ちが湧いてきます。この支援を応援し、見守っていきたいと思います。

大塚隆史
（バー・タックスノット店主／造形作家）

私は虐待や性暴力被害を受けるなどし、安心して暮らせる場所をなくした10代女性を支える活動をしていますが、LGBT当事者の若者からの相談は少なくありません。LGBTであることを理由に公的なシェルターが利用できなかったり、入所できる施設や暮らしの場がなかなか見つからないことも多く、当事者の方が安心して過ごせる場所は圧倒的に不足しています。どんな人にも安心して心と体を休められ、落ち着いてこれからのことを考えられる場が必要です。困難な状況に置かれた人の人権を守り、支援の選択肢を増やそうとするこのプロジェクトの継続を応援します。

仁藤夢乃
（一般社団法人Colabo 代表）

今でもよく、大学時代に出会った一人の同級生のことを思い出します。彼女は恋愛対象として、女性を好きになる人でした。当時は「LGBT」という言葉は殆ど知られておらず、日ごろの何気ない会話の中に紛れ込む偏見に、彼女が深く傷つく姿を見てきました。そして彼女たちが生き心地のいい社会をどう築けるだろう、とその都度考えました。

職を得られなかったり、不安定な気持ちの行き場がなくなり、働くことさえ困難になったりしたとき。「もうだめかもしれない」と諦める前に、LGBT支援ハウスのことを思い出して下さい。安心して寝泊まりできる空間がそこにあるだけではありません。「あなた」のことを支えようと努める人が、そこにいるから。

安田菜津紀
（フォトジャーナリスト）

LGBT支援ハウス運営1周年おめでとうございます。

近年、日本の社会情勢の中でLGBTがとても大きく話題になったことは喜ばしい半面、いまだに多くの当事者の方々は、支援ネットワークに繋がりにくく、声を上げられないという現状があることも事実です。

私は安心・安全を感じられる場所があることが社会復帰への第一歩だと強く信じています。LGBT支援ハウスはその場所の提供、そして負のスパイラルを止め、ニーズに合った支援をするという、まさに現代社会に必要な支援サービスを行っています。

活動報告に目を通すと、現場のリアルな声を知れると同時に、LGBT支援ハウスがあって本当に良かったと安堵を覚えます。しかし、継続的な支援が必要な現状は変わりません。

一人でも多くの方に支援の手が届くようにこれからも微力ながら応援させて頂きます。

SHOGO
（初代ミスターゲイジャパン／高校教諭）

「LGBT支援ハウス」の立ち上げを耳にした時、ほっとしました。私は22歳のとき、生活が困難になり、真剣にセックスワークを考えました。その時もしLGBT支援ハウスに駆け込んでいれば、大学も中退せず、もっと安心して大人になれたかもしれない。LGBTQコミュニティーの可視化が進み、肯定的な空気が流れる一方、メンタルヘルス問題や家族問題から生まれる「ホームレスネス」はコミュニティー内でとても深刻です。私たちが少しでも安心して生活できる世の中になるように、LGBT支援ハウスを心から応援しています！

Hiraku
（中村キース・ヘリング美術館
プログラム&マーケティングディレクター）

「Be Yourself」はインクルシビティを推進するために2011年からAlfa Romeoが実施している社会貢献活動です。

LGBT支援ハウスはインクルシビティと人が孤立してしまう課題を結び付けた、新たな素晴らしいプロジェクトです。

より深く混ざり合う社会を実現するために最も弱い立場にある人々に手を差し伸べましょう！

ティツィアナ・アランプレセ
（FCAジャパン株式会社 マーケティング本部長）

よいことが起きると、みんなで分かち合おうとする。だが、そろそろ、私たちはそうでないことも、分かち合う準備をしてよいのではないだろうか。なぜなら、生活上の危機は、いつ、だれに起こってもおかしくないからだ。

危機はさまざまなかたちをしている。貧困、孤立、差別など、だがもっとも深刻なのは「疎外」だ。困難にある人を視界の外に追いやってしまう。

苦しみを分かち合うのにもさまざまなかたちがある。だが、どんなひとにも必要なのが、心身を休めるための「家」だ。家はいつもなくてはならない。ありつづけなくてはならない。LGBT支援ハウスは、そうした場所を生み出そうとする試みだ。助けられた人は、かならず、目の前で困っている人を助けるようになる。むしろ、ひとたび傷ついたことのある人が、世の中を変えていくひとなのかもしれない。

このプロジェクトに参加することで私たちは、誰かを支援するのではなく、ともに世の中を少しよくしていきたいという仲間たちと出会おうとしているのではないだろうか。そして、困難を生きてきた人たちに、何かを学ぼうとしているのではないだろうか。

きっと予想もしない何かに出会えると思う。

若松英輔
（批評家・随筆家）

LGBT支援ハウスがスタートして、1年が経ちましたが、この間、ハウスはフル稼働で利用されてきたことが報告されています。やはりセクシュアル・マイノリティで緊急事態にある人たちが数多くいることがはっきりしただけでなく、どんな困難を抱え、どのように解決していくのか、具体的な姿が伝わり始めました。つまり、今まで知られず、ひっそり苦しんで行き場をなくしたセクシュアル・マイノリティの人たちが、安心して助けを求めていいのだ、と思える機会が増えているのです。ニーズはますます増えるでしょう。重要なのは、支援の継続です！

星野智幸
（作家）

LGBT支援ハウス開設1周年、おめでとうございます。LGBTIQの困難は、困難に陥っている時でさえシェルターを利用できないかもしれないという困難が重層化するという事です。大変な時に適切な支援を受ける権利は誰にも提供されるべきですが現実にはそうなっていない。その現実に立ち向かうべく、これまでの活動の中でLGBTの困難に対応してきた皆さんが連帯して出来た「LGBT支援ハウス」は希望のロールモデルです。LGBT支援ハウスの充実が日本全国に行き渡る事を夢見て、お祝いのメッセージとさせていただきます！

宇佐美翔子
（BROKEN RAINBOW-Japan 代表）

映画『サタデーナイト・チャーチ ―夢を歌う場所―』をご存知でしょうか？　NYで土曜日にLGBTQのために教会が開放されるのですが、それをベースにした物語で、多くの方にぜひ観て欲しい作品です。

私はLGBTQ先進都市と言われるNYやロンドンに11年ほど住んでいましたが、そう言った都市に比べて東京はまだまだ遅れを取っているなと感じます。

ネットで気軽に情報が入るようになっても、家庭や学校、職場などの社会の狭い概念が真の「自分らしさ」を生きる・表現する事を阻むのはとても悲しい事です。

もし愛する我が子や友人、仲間などの身近な人が行き場を失い、追い詰められていたとしたら。

いざという時に支えになる場所は誰にでも必要なものです。LGBT支援ハウスがそうした希望の場所として、広がっていきますように。

レイチェル・チャン
（ラジオパーソナリティ）

私たち性的マイノリティはしばしば、社会から隔絶されているように感じたり、自己の価値を見いだせなくなったりします。それらは自分自身の可能性を狭め、時に自らを暗礁へと乗り上げさせてしまいます。

LGBT支援ハウスは、進むべき道を照らす灯台であり、同時に疲れた身体を休める港でもあると、私は考えています。

人生はいつも順風満帆というわけにはいきません。時には自らの帆をたたみ、同じ境遇の仲間との交流の中で、人から大切にされ、そしてまた自分も人を大切にする。

人と人との間の双方向の愛と思いやりの交換こそが、人間としての真の自立へと漕ぎ出す為の推進力になるのではないでしょうか。

Keiko Matsumoto
（グラフィックデザイナー）

LGBT支援ハウスへのご支援を！

女優／誰も排除しない
「まぜこぜの社会」をめざす
「一般社団法人 Get in touch」代表
東ちづる

今の日本社会では、住処を持てない、持たない人たちが増えています。頑張れない、頑張っても報われない社会の仕組みなど、複合的な理由があるからです。しかも、マジョリティが構築してきた「フツウ」「常識」「自然の摂理」などが、マイノリティの存在をないものとしてきたので、ダブルパンチ。普段から生きづらさを抱えている人が、ますます追い詰められてしまう現実があるのです。「困っている人、弱っている人は、私の周囲にはいない」と言う人は、気づいていないだけでしょう。家族に、親戚に、友達に、つながる人に、必ずいます。どんな状況でも、どんな状態でも、誰も排除しない社会は、全ての人に居心地いいはず。自分のために、誰かのために考えて、アクションをしていけば、必ず社会は変わります。このきっかけにつながりましょう。

「ヒューマン・ライツ・ウォッチ東京委員会」ヴァイス・チェア
柳沢正和

新宿2丁目で飲んでいると、時々暗闇の向こうにポッカリ穴が空いているように感じることがあります。つい最近までよく顔を見ていた人が、様々な問題で突然失踪したり、鬱を患ったり。肩を一時的に寄せ合えても、それまでという事も多いです。行政や既存の団体が提供できなかったセーフティーネットを、この団体は提供しています。自立を支援する事で、好循環が生まれようとしています。

いつか自分も闇の中に落ちるかもしれないという恐怖。そういった不安に一つひとつ丁寧に向き合う活動に心から賛同します。またこの活動は寄付によって支えられています。ぜひ共感を形にし、寄付としてご協力いただければ嬉しいです。よろしくお願いします！

「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」相談役
稲葉 剛

近年、日本社会の貧困が「見えにくくなった」とよく言われます。今、東京の街を歩いていて、欧米の大都市のように路上生活者が街にあふれている風景を目にすることは少なくなりました。しかし、ネットカフェや24時間営業のファストフード店などで寝泊まりをしている人は逆に増えていると考えられます。そんな「見えにくい」貧困層の中でも、最も「見えにくく」、SOSを出しづらい立場に置かれているのがLGBTの生活困窮者です。LGBT支援ハウスのこの一年の取り組みによって、孤立しているLGBTの生活困窮者の存在を一定程度、「見える化」することができました。次はその人たちに届けることができる支援をどう増やしていくかが課題になっています。毎度のお願いで恐縮ですが、「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」へのさらなるご支援をお願いいたします。

寄付のお願い

皆さまからのご支援をお願いします。
【郵便口座のご案内】
記号：10330
口座：87996301
名義：LGBTハウジングファーストを考える会東京
（エルジービーテーハウジングファーストヲカンガエルカイトウキョウ）

LGBTハウジングファーストを考える会・東京

住所：〒164-0001
東京都中野区中野3-45-15
ミカミハイツ103 LOUD気付
●Eメール：info@lgbthf.Tokyo
●公式サイト：https://lgbthf.tokyo/
●Twitter：@LGBT_HF
●Facebook：@LGBTHF

寄付はこちらから

『LGBT支援ハウス』報告書
2020年3月発行
発行：LGBTハウジングファーストを考える会・東京
編集：山縣真矢　デザイン：潟見 陽
※本報告書の作成にあたっては、パルシステム東京市民活動助成基金を活用させていただきました。